高尾山報 令和元年10月号 毎月1回発行 通巻第669号

高尾山報

天高し
交通安全
祈願の火

令和元年10月号

高尾交通安全協会主催

交通安全パレード・火のまつり　於・山麓祈祷殿大広場

法の水茎 (88)

大正大学講師　髙橋秀城

九月に襲来した台風十五号は千葉県を中心に大きな爪痕を残しました。停電や断水など甚大な被害に遭われました皆さまのご心痛、いかばかりかとお察し申し上げ、一刻も早く元通りの日常が戻りますことを衷心よりお祈り申し上げます。

秋のお彼岸を過ぎてから、少しずつ日が短くなってきました。「秋の日は釣瓶落とし」という諺や、「短い秋の日は瞬く間に暮れる」という歌詞があるように、瞬きを何回か繰り返しているうちに、太陽は山の端に沈みゆきます。

陽が落ちて、涼やかな秋風とともに虫の音が聞こえてくれば、物悲しさを覚える夜があるかもしれません。澄んだ空気に呼応するように、あれこれ物思いに耽ってしまうのが「秋の夜長」の侘しさなのでしょう。

「〜の秋」という熟語をよく耳にします。読書・芸術・実り・食欲・行楽・スポーツなどなど……皆さんはどのような秋を思い浮かべますか。秋は瞬く間に過ぎゆきますが、過ごしやすい気候で、集中力が増す折節でもあります。いろいろなことに取り組める「チャレンジの秋」にしたいものです。

秋刀魚食ふ
月夜の柚子を
もいできて
（加藤秋邨）

サンマ（秋刀魚）は、その名の通り秋を代表する魚です。昔から庶民の味覚ですが、近ごろは不漁が続いているようです。いずれは高級魚として食卓に上る日が来てしまうのでしょうか。

この「秋刀魚食ふ」の句では、月夜の晩に柚子をもぎ取っています。サンマに柚子を搾って食すのかもしれません。月と柚子が輝く宵に、サンマを焼く香ばしい匂いと煙が漂ってくるようです。

ところで、漢字で「魚へんに秋」と書く魚をご存じでしょうか。答えは、カジカ（鰍）です。清らかな河川に住む魚で、体表には鱗がなく、蛙のように滑らかな皮膚を持っています。鹿肉のように美味しい魚という意味から、カジカ（鰍）は「河鹿」とも表記されます。

ここで思い起こされるのは、美声で知られるカジカガエルという蛙でしょう。鳴き声は笛を吹くように聞こえ、それは鹿の美しい声に似ることから河鹿蛙と呼ばれました。実際には魚のカジカ（鰍）は鳴きませんが、古の人々は、カジカガエルの声に鹿の鳴き声を重ね合わせ、心惹かれていたのです。

では、鹿はどのように鳴いたのでしょう。

奥山に
紅葉踏みわけ
鳴く鹿の
声きく時ぞ
秋は悲しき
（『古今集』猿丸大夫）

（人里離れた奥山で、紅葉した落葉を踏み分けながら歩いていると、どこからか鹿の声が聞こえてくる。そんな時こそ、秋の悲しさがいっそう身に沁みてくる）

鹿もまた秋を代表する動物です。秋になると、雄鹿は妻を求めて悲しげに鳴くと言われました。鹿の鳴き声には、愛する者を想い、恋い慕う感情が込められていると思われていたのです。

鹿をめぐっては、次のように伝えられています。鹿を捕らえて、檻に閉じ込めて、その居所の檻を立派にして、食べ物を素晴らしくして養ったとしても、その身は必ず痩せていきます。なぜなら、鹿は山のことだけを考えているからです。

もし、ただ安らかに山で寝起きしている時には、草と水ばかりを口にしていても、身も肥えていきます。これは、心安ければ肥え、心が苦しければ痩せるということです。

ですから、安心して、思い煩う苦しみがないほど楽しいのです。この現世においても、心安らかであるのみならず、罪も妄念も無くして仏道修行に励んだならば、来世はきっと安心した頼もしいものとなります。

白楽天は「財産が多く地位が高くても、苦しみがある。苦は心の憂いにある。貧しく地位が低くても、楽しみがある。楽は身の自由にある」と言われました。本当にその通りです。だから全てを忘れ、全く悩みごとの無い身となるほど楽しいことはないのです。

（『沙石集』）

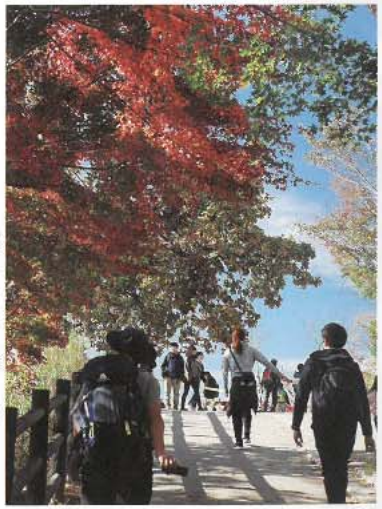
楽しみとは何か、苦しみとは何かを考えさせられる話です。人間は飽き足ることなく、名誉や財産を追い求めてしまうものです。地位や名声を得ていても、有り余るほどのお金を持っていても、それに満足せずに憂いているとするならば、これは真の幸福と言えるのでしょうか。もしかすると、執着という思い込みを捨ててこそ、何にもとらわれない自由な境地が手に入るのかもしれません。

智者は秋の鹿
鳴いて山に入る、
愚人は夏の虫
飛んで火に焼く。
（『源平盛衰記』）

（賢人は、秋の鹿のように山の中に隠れて俗世間から遁れようとする。愚人は、夏の虫が自ら火に飛び込むように、俗世に溺れて自身を窮地に陥れようとする）

「飛んで火に入る夏の虫」に対する「鳴いて山入る秋の鹿」でしょうか。山奥で悲しげに鳴いている鹿は、相手を想いながらも、実は短い秋を謳歌しているのかもしれません。俗世を離れた錦秋のお山に分け入りながら、「真の幸福」について考えてみたいと思います。

（栃木北部教区普済寺）


俗世を離れ錦秋のお山に分け入る

台風十五号被災者の皆様に御見舞い申し上げます

千葉県南部を中心として関東地方を襲った台風十五号による未曾有の被害を受け、被災された多くの皆様に謹んでお見舞い申し上げ、災害により犠牲となり、お亡くなりになられた方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。

そして、一刻でも早い復興と、平安なる日々が訪れますようご祈念申し上げます。

大本山　髙尾山　薬王院

聖天堂開扉法要

九月十四日〜十五日

高尾山 台風被害甚大

関東地方を襲った台風十五号（九月八日～九日）

九月八日の深夜から翌日未明にかけて関東地方を襲った台風十五号は、各地で甚大な被害をもたらし、高尾山にも、その爪痕を残した。

台風明けの九月九日、境内各所は強風による落枝が道を覆い、薬王院から山頂へと向かう飯縄権現堂（御本社）周辺においては、倒木によりフェンスを押し潰される等、通行が困難であった。

山内職員とお茶屋さんが総出で倒木を伐り出し、散乱する枝を取り除く等の作業を行った。

また、琵琶瀧水行道場においては、長期に及ぶ道場事務所の停電、倒木による玉垣や「開瀑式寄付者御芳名看板」等の損壊が発生しました。

御信徒の皆様方におかれましては、通行規制を実施したため、迂回路を通行して頂くなど御協力頂きましたこと、謹んで御礼申し上げます。

危うく倒木による被害を免れた御本社

倒木により破壊された琵琶瀧の「開瀑式寄付者御芳名看板」

参道各所を塞ぐ倒木

被災地早期復興　国土安穏　三社寺合同復興祈願祭

九月六日

僧侶・神職が日本各地の被災地復興を願い、祈りを捧げた

去る九月六日、大山阿夫利神社と北口本宮富士浅間神社、高尾山薬王院の三社寺は、大山阿夫利神社下社にて、全国災害復興祈願祭を行い、関係者約四十人が参列されました。

この法要は、平成二十三年に発生した東日本大震災の慰霊祭を合同で行ったことを契機として、現在では東日本大震災のみならず、日本各地で発生した様々な災害の、被災地復興を祈るため、一年毎に三社寺の輪番で行われております。

祈願祭では、大山阿夫利神社の日黒宮司斎主のもと、参列された皆で祝詞である大祓詞を奏上し、僧侶・神職による神仏融合の祈りの中、被災地の早期復興と、国土安穏を静かに祈る一時となりました。

折り折りの記 (122)

食べ滓の鰯の骨を待つ鴉

波多野　重雄

「鰯食ふ大いに皿をよごしては」の八木林之助の句を思ふ。魚に上品、下品があるとすれば、上品の魚の代表は結婚式等の尾頭付の鯛である。日本古来より、美意識の魚の王者の貫禄がある。

又、庶民的代表は秋刀魚、鰯であろう。夕暮れ、庭に焜炉の煙に匂ふ秋刀魚に、野良猫ばかりでなく人も匂ひに立ち止まる。

私が高尾山を極め、頂上から下りて来た或る昼下がり、茶店の人が鰯滓を置いたとたん、木の枝で待っていた鴉が掠め銜えて飛び立つ、その早業に瞬時見惚れた。まるで打合せでもしているかのような、自然界の出来事に一瞬驚いた。

（高尾山健康登山の会会長）

登有喜苑（四）

厚木市　荒井　一雄

白亜仏塔作坐臥
顕密経典自唱和
花開鳥啼歓喜仏
青天孤雲悠然過

古都の寺
めぐりまわりてかへりくる
薬王院にまさる寺なし

有喜苑に登る（四）

大白仏塔に圧倒されて、
坐し臥す（五体投地礼をす）…
顕教・密教経典を自ずと唱和す…
花は開き鳥は啼き、
仏陀を大いに喜ばせ、
青空に孤雲は悠然と過ぐ…

葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉛

明治大学博物館　外山　徹

藩士との交流 Ⅱ

補遺編の二回目として、引き続き和歌山藩士との交流についてスポットを当ててみたい。

佐野伊左衛門

前回は浅井庄左衛門・村岡八蔵という、高尾山に対する紀州家側の窓口となった人物を取り上げたが、その立場として最初の人物が佐野伊左衛門時春である。高尾山と紀州家との関係が最も親密だった八代藩主重倫時代におけるキー・マンを浅井とすると、六代宗直時代のその役柄は佐野であった。

紀州家との関係はその宗直の頃からという伝になるが、その同時代の史料として、かつ薬王院文書の中で紀州家と関わる最も古い年次をもつ史料が宝暦五年（一七五五）二月付の葵紋付戸帳・水引の寄進に関わる佐野からの音信である。その書状は年欠だが、内容が居開帳実施に際しての寄進なので、別の史料の記事にも照らして宝暦五年と時期が判明する。また、文面には以前に寄附した戸帳・水引が破損したので、新規に寄進を願い出たものを承知したとある。これは、最初の寄進からは相応の年数の経過を示すもので、紀州家との関係が宗直藩主就任間もない享保期（一七一六～三六）頃から始まったという推測の根拠となる。

その佐野と薬王院との間が殊の外親密なものであったことを示す書状が遺っている（写真）。

拙者義は兼ねてお頼み申しそうろう通り、大役相勤めそうろう義そうら得ば、いよいよ故障無くご祈願下さるべく（中略）初穂金［欠損］御備え申し上げ、ご神前において御札宜しく願い奉りそうろう

ただ藩主の祈願の取次ではなく、自身の心願を述べるような間柄であったことがわかる。

佐野伊左衛門時春は享保三年（一七一八）六月に表小姓として出仕。その後、御膳番格兼任を経て小姓頭となり「御勝手向きの御用、且つ又、御召物等の御用筋をもあい勤め、御馬の義も肝煎り」とあるので、藩主宗直の側近くにあって何かと主の面倒を見る立場にあったようだ。延享四年（一七四七）には、江戸中御役者之儀肝煎として江戸藩邸に勤める。その後も、御勝手方在方共御用という財務方・徴税方の役職に就きつつも、「御前向き御用筋勤め馴れそうろう事にもそうろう間、只今までの通り御前へもまかり出で御用の間」と、その時の役職に関わらず藩主宗直の直近の御用を務め続けていた。

宝暦二年（一七五二）六月に大番頭。これは警護や出陣の総責任者という重職を意味する。先の書状にある「大役相勤め」とはこのことかもしれない。

飯縄大権現への祈願を伝える佐野伊左衛門の書状

没年の宝暦五年十月は、先の戸帳・水引寄進の書面から一年経たない時期である。つまり、薬王院文書に残る佐野の書面はその最晩年のものとなる。享年が判明していないが出仕からは三七年。小姓としての出仕なので浅井庄左衛門の事例を参考に一〇代前半の出仕とすると五〇歳前後の死ということになる。当時としても、まだまだ働き盛りの

ことだっただろう。

高尾山と紀州家との間の音信は、この佐野による書面の次は明和八年（一七七一）の八代藩主重倫による薬王院隠居湛玄宛直筆の書状となるので二六年のギャップとなる。佐野の死没は一時の関係の途絶の契機となったのかも知れない。それにしても、藩主自身はともかく、その間を取り持った家臣自身が高尾山に帰依を示していたことは興味深い。

薬王院の藩邸訪問

さて、先に引用した佐野の書状は、むしろそれより前段にある記事がその本来の趣旨だったようだ。「その砌は鈴木源兵衛病気これ有りそうろう処、御深志ご祈祷なし下され」と、藩士への病気平癒の祈祷に対し、快気を伝える礼状だった。ところで、薬王院住持が江戸の藩邸を訪れることは度々あったようだ。安永元年（一七七二）の暮れには、浅井庄左衛門の書状にある「明日はこの表ご出立成られそうろう由」「寒中別してご旅行ご大儀存じ奉り」「随分寒気おしのぎ御山着き成られ」という文言から、山主秀興が江戸の和歌山藩邸を訪れていたことがわかる。翌年の三月九日付でも「昨日は御出の処、御意を得ず、御（名）残り多く存じ」という文言があり、この時は秀興の権僧正拝任のため京都に赴く際の洛中洛外諸寺社への重倫病気快然の祈祷執行に関わる折衝に訪れたようだが、結構な頻度で藩邸を訪れていた様子である。そうすると、先の鈴木源兵衛の場合、そうした折に家臣に対する祈祷をおこなったということも考え得る。

家臣への祈祷

家臣に対する祈祷の事例は他にもある。四月二五日付の浅井庄左衛門による神符頂戴の礼状がある。これは夏目次右衛門という者の病気平癒のための神符であった。

年次のない書状であるが、夏目が「途中よりあい煩い」とあり、後段には代参に下役を遣わしたのは我々同席の八名では座数が不足する故と申し開きの文章があり、これは明和九年二月から五月にかけて重倫の病気快然を祈願した八千枚護摩供十座の執行に関わることとわかる。「途中より」というのは、夏目がこの時代参に訪れた（四月）八日到着、翌日護摩、一〇日朝出立」という表向きの記録の背後にあるアクシデントだったのである。すなわち、護摩供の最中に不調を訴え、とりあえず予定のスケジュールで下山したものの、江戸へ帰った後も不調が続いたものと見える。この間の事情については、「十日余り以前より瘧疾にて未だ落ち申さず」とある。「瘧疾」とは発熱と悪寒を訴える症状のことで、熱帯病のマラリアを指す。マラリアは周期的に発熱と解熱を繰り返すので、たまたま登山の折には症状が収まっていたものが、護摩供の最中に発熱の症状が出たというものだろう。そのため、「何卒お影にて早く快気いたしそうろうよう、ご神符を戴き申したく御座そうろう」となった次第である。

その後、年不詳ながら記事からこの続きの書面であることがわかるが、「昨日（夏目）次右衛門方へ御符遣わされ下されそうろう所」「段々明け方相成り、そうてい（惣体）軽き方に相成り」という書面がある。高尾山の神符が届いたところ、症状が改善したというものだが、明け方になって「軽き方に相成り」とは、家人が寝ずの看病をするところ御利益あって快方に向かったという何とも生々しい状況を示している。神符の御利益か、マラリア特有の解熱症状（発熱によって一時的に体内の原虫の活動が鈍化する）か定かではないが、当時の人々の病気に際しての神仏に対する期待の程が生々しく伝わってくる。マラリアは、解熱時は通常と変わりなく、発熱時は急に高熱が出るというので、発病の要因を知らない当時の人々にとっては、悪魔・悪霊の仕業と理解するよりなかったのだろう。

家臣の登山

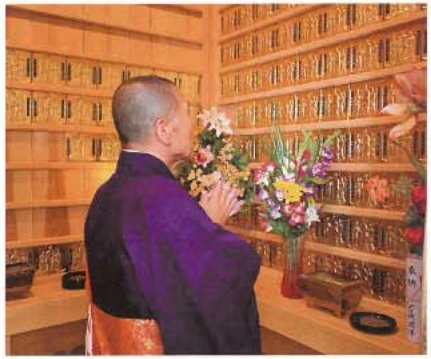
紀州家の当主が高尾山に参詣した様子は確認できないが、家臣の面々はこの明和九年の八千枚護摩供以外にも、翌安永二年早々の星供には鈴木覚太夫が、十万枚護摩供には駒木根八兵衛が、というように交替で代参に訪れている。故郷和歌山を遠く離れた江戸詰めの家臣にとって、高尾山へ登山する心持はいかばかりであっただろうか。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

お釈迦様と尊い御縁を結ぶ

仏舎利塔奉安懸仏総供養法要厳修（九月十一日）

菅谷執事長により洒水加持が行われる



懸仏を懇ろに供養する

法要に先立ち法話が行われる

仏舎利塔を参拝される御信徒

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安してある仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

結縁牌懸仏新規奉納者御芳名

調布市　原田　充彦
八王子市　原　博子
青梅市　村越　愛子
八王子市　北　準治
〃　峰尾　哲也
練馬区　加藤　みえ子
町田市　米山　煌美
印西市　川添　冨士美

（順不同・敬称略）

観音菩薩の宗教 ㉒

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

阿修羅と観音菩薩

前回は忿怒相として現れる馬頭観音菩薩について見た。今回も、観音菩薩の応現の一尊で、しばしば忿怒相で現れる阿修羅について考えてみたい。

阿修羅は漢字の音写で、原語のヴェーダ語やサンスクリット語など古代インド語ではアスラ（Asura）という。古代アーリヤ人の信仰ではアスラは善神であったと考えられ、神々の讃歌『リグ・ヴェーダ』では最初の出産者とされ、両性具有の牡牛として表されている（辻直四郎訳注『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、一九七〇年）。またアスラは雷霆神インドラと闘う神として描かれている（同）。

のちの『ブラーフマナ』などの文献では、アスラはア（非）・スラ（神・天）と捉えられるようになり、魔神の性格を強めていった。インドの多神教世界では、大別して二種の神々が現れる。第一は友愛に富み温情親しみやすい神々で、第二は近づき難く恐るべき魔力を持つ魔神・鬼神である（辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』創元社、一九五三年）。このうちインドラは前者に、アスラは後者に属する。後世のヒンドゥー神話ではアスラは神々に戦争をしかける敵として描かれ、ヒンドゥー教徒にとって最高神の一尊であるシヴァ神に殺される役割を負っている（ヴェロニカ・イオンズ『インド神話』青土社、一九九〇年）。

ヒンドゥー教の神々は治病や豊作など多様な現世利益に応えることを強みとした一方、ブッダの教えは自己の修練を中心とした教えで功利性には否定的であった。そのため、ヒンドゥー教が興隆してくると仏教はその教勢に押されるようになった。仏教は教勢恢復の方策として、時に布教によりヒンドゥー教徒を仏教に引き戻そうとし、時にヒンドゥー教の神々を仏教に受容して信者の要望に応えようとした。ヒンドゥー教を起源とする尊格には、そうした歴史的経緯が反映している。例えば、馬頭観音などの忿怒相は、容易に仏教に帰依しない難化の衆生を折伏することの反映である。他方、千手千眼観音など多面多臂の変化観音は、ヒンドゥー教の神の図像を「まね」て、それを「観音が神々の姿に変化して衆生を済度するという変化思想によって、合理化した」ものであった（田中公明『千手観音と二十八部衆の謎』春秋社、二〇一九年、二八頁）。アスラが仏教に受容された経緯は不詳であるが、ヴェーダ以来アスラが有していた特性を保持しつつ、仏教的変容を遂げていったことは、図像的にも思想的にも看取できる。

調布市西光寺所蔵の阿脩羅立像
江戸期。調布市指定文化財。詳細は本文参照

アスラの持つ魔神的性格は、仏教の六道輪廻における阿修羅道、もしくはその住者たる阿修羅に現れている。初期の経典に「ブッダは業論者であり精進論者である」（『アングッタラ・ニカーヤI』）と述べられている通り、ブッダは人間の業すなわち行為（カルマ）をもっとも重視した。六道輪廻の思想は、業思想と仏教以前から信ぜられていた輪廻転生思想とが結びつき生まれたものである。

六道の道（ガティ）とは「行った先の世界」の意味で、地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・人道・天道の六つをいう。これらの世界を生まれ変わっていくのが輪廻転生で、生まれる先は前世の業が決定した。このうち、阿修羅道には他者を憎んだり、嫉妬心を持ったり、他者の失敗を喜んだり、戦いの心を有した者が堕ちると説かれた。

『正法念処経』によれば、阿修羅は阿修羅道に住して、日・月食を起こしたり、龍と戦い地震を発生させたり、人や天を破滅させるための戦いを行っているとされる。阿修羅は力において人に勝り、徳において人に劣り、成仏の可能性が人より低いと信ぜられた。奈良の長岳寺所蔵の『極楽地獄図』（安土桃山時代）には、太陽を示す赤玉と月を示す白玉をそれぞれ左右の手に掲げ、戦争をし続ける焔髪（怒髪）の阿修羅が描かれている。日月を持つ姿は敦煌莫高窟の第二四九窟に描かれた六世紀の阿修羅にも見られ、しばしば阿修羅の持物の典型となっている。その根拠の一つは、唐・不空訳『補陀落海会軌』に「左の第二手は火頗胝（日）、右の第二手は水頗胝（月）を執る」とあるによる（河原由雄「牙をなくした阿修羅―日本における阿修羅像の展開」『阿修羅を究める』小学館、二〇〇一年）。

阿修羅のネガティブな性質は、『法華経』「普門品」において大きく転換した。観音菩薩は衆生済度のため時宜に応じて阿修羅などの三十三の姿に変わると説かれた（拙稿「観音菩薩の宗教⑨」）。これにより阿修羅は観音信仰に取り込まれ人々の信仰を得たが、これら三十三すべてを造形化して今に伝える例は多くはない。以下に貴重な二例を紹介しよう。

鎌倉の長谷寺（浄土宗系単立）の観音ミュージアムは、観音菩薩の三十三の変化身を揃えている。それらは「普門品」の三十三とはやや異なるが、その一尊として阿修羅像を今に伝えている。像の身体は裸形で忿怒相の三面六臂、左の二手に刀杖と宝石、右の二手に宝石、宝印を持っている。江戸期の修復があるものの、室町期の作と推定されている（『鎌倉長谷観音―歴史と文化財』長谷寺、一九八二年）。

東京・調布市の西光寺（天台宗）が蔵する観音菩薩の三十三の変化身像は、現存する江戸期木造彫刻の名品である。そのなかの阿脩羅立像は三面六臂で忿怒相を示し、合掌手の後ろの二手は持物がなく、後方の二手の右手に日、左手に月を掲げている。持物を有する左右の手は先の経典的根拠とは反対である。その忿怒の表情は、難化の衆生や悪人を折伏する迫力に満ちている。

阿修羅はまた、八部衆もしくは二十八部衆として仏教の護法神の地位を得た。八部衆はインドから中国へと仏教美術が伝播する過程で大きく変貌した。宮治昭は八尊をセットとする造形も、漢訳仏典をもとに中国で成立したと推定している（『仏像学入門』春秋社、二〇〇四年、二三九頁）。一方、田中公明は「八部衆の拡大版ともいうべき二十八部衆」は、伽梵達摩訳『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』（大正一〇六〇）およびそれに相当する部分を含むチベット語訳などから、二十八部衆の原形は同経に説かれた護法神群にあるとし、神々のサンスクリット名の復元を行った（田中、前掲書）。二十八部衆は千手観音の眷族となり、観音信仰の一部を形成した。千手観音を本尊とする蓮華王院（三十三間堂）や清水寺に祀られる二十八部衆は、そうした信仰における代表的な作例である。

八部衆の一尊として著名なのは、辛くも排仏毀釈の破壊を免れた乾漆造の阿修羅像（奈良時代・興福寺蔵・国宝）である。その尊顔が忿怒相を示さず、深い想いを湛えたように映るのは、この阿修羅がブッダの説法を聴聞している姿だからとされる。その根拠は『金光明最勝王経』「夢見金鼓懺悔品」である（東野治之「阿修羅像と天平文化」『阿修羅を究める』）。そこで阿修羅は釈迦十大弟子とともに金の太鼓の奏でる音楽を聞きながら懺悔滅罪の法を聞いている。阿修羅の表情には、過去より背負った罪を懺悔して仏教に帰依した時の内面が看て取れる。興福寺の像より古い作例の法隆寺の阿修羅坐像（奈良時代初期・国宝）にも、ブッダに帰依した阿修羅の表情が示されており、併せて記憶したい。

高尾交通安全協会主催　九月七日(土)

交通安全祈願柴燈大護摩供厳修

（於・祈祷殿大広場）

パレードに参加する高尾交通少年団

交通安全協会の皆様と高尾幼稚園の園児達

山伏による交差点の安全を祈願するお祓いが行われた

菅谷執事長大祇師のもと、交通安全祈願の柴燈大護摩供が厳修された

交通安全協会の小松会長

交通安全を願い、「なで木」を浄火に投入する

交通事故に遭わず無事に過ごせますように…

第十三箇度富士登拝修行記

七月三日～七月八日

法務課　岡野　忠良

体にバシバシと打ち付ける激しい雨。ビュービューと吹く突風。十m先が見えない程の濃霧。濡れた岩場を転げ落ちてしまうのではという緊張感。そんな悪天候の中、私たちは八合目の山小屋を目指して、歩みを進めていました。

令和元年七月三日から七月八日に掛けて、第十三箇度霊峰富士登拝修行が行われました。「令和」という新たな時代を迎えてから最初の修行会となりました。今回私は五日の夕方からの参加となり、富士吉田市の大国屋という宿で、三日から歩き続けていた方々と合流しました。

翌朝、六時四十分に大国屋を出発し、まず北口本宮富士浅間神社にて、道中の安全を祈願する為に参拝。その後、境内を抜けて富士山麓林道へ進みます。この時、天気は曇り空で気温も涼しく、歩くのには快適な環境でした。

私たちは道中休憩を取りながら富士山麓森林内へと入って行き、吉田胎内と呼ばれる、遥か昔から富士行者が修行をする場所へと向かいました。吉田胎内とは、過去に富士山が噴火した際に流れ出た溶岩が木々を巻き込み、中にあった大木が燃え尽き、そこに出来た空洞がつながって洞窟となったものです。後に、この洞窟には大日如来が安置され、富士行者の行場となりました。

吉田胎内に入り、洞窟内の赤い砂礫で全身を真っ赤にした状態で最後に出てくる姿は、まるで母親の胎内から出てきた赤子の姿に見えると言われています。つまり、胎内に入ることで自分自身を見つめ直し、外に出た時には新たな心と体になって生まれ出る、というのが吉田胎内に入る意味となっています。

私たちはヘルメットとヘッドライトを着けて吉田胎内の先達である、牧田先達の案内のもと胎内を進みます。入口を下ると、目の前には広い空間が見えてきます。高さは百cm程で直立では立つことが出来ず、中腰で移動をします。その後私たちはヘッドライトを消して、暗闇の中でお経を唱えます。十人ほどで唱えると内部で声が反響し合い、まるで二十人以上で唱えているようでした。時折天井についている水滴が地面に落ちた音も響き、なんとも幻想的な空間となっておりました。最後に、人一人が通れるだけの狭い幅の急斜面を這いながら登って行き、出口の穴から抜け出します。

吉田胎内を後にした私たちは、中ノ茶屋というお茶屋さんに到着し、そこで昼食を頂きました。昼食後、中ノ茶屋から富士登山道の入口を目指して林道を歩き続けている途中、大粒の雨が降りだしました。私たちはすぐに合羽や網代笠を身に着け、雨に打たれながら歩き続けますが、湿気も強くなり、体温は上昇し、背中には汗が滝のように流れ落ちます。蒸し暑さに耐えながら富士登山道の入口に無事辿り着き、そこから五合目の佐藤小屋という山小屋を目指して登拝しました。

そして十七時頃、五合目にある佐藤小屋に無事到着することが出来ました。霧の向こう側に佐藤小屋の影が見えた時は、安堵の息が漏れました。その日の夜は佐藤小屋にて、私たちと同じく富士登拝修行に来ていた、成田山東京別院深川不動堂の皆さんと一緒に楽しい夕食の時間を過ごしました。

翌日、八時に佐藤小屋を出発し、八合目の元祖室と呼ばれる山小屋へ向かいました。この日は出発前から大粒の雨が降っており、登拝するには十分注意して進まなければなりません。最初は土の道ですが、段々と石が増え砂利道となり、最後には土が無くなり岩肌の道となります。そんな道を歩くだけでも中々大変ではありますが、そこに悪天候が重なり、前に進むのが一苦労な状況となっていました。濃い霧によって前方は見えにくく、後ろを振り返れば登って来た道も見えず、体にぶつかる大粒の雨、体のバランスを崩してしまいそうになる横風、そして雨によって濡れた岩場、一歩間違えれば転げ落ちてしまうのではと考えてしまう緊張感。一歩一歩に神経を集中し、安全なルートを選びながら進みました。

このように緊張感を持って登り続けていると、

必然的に体力の消耗が激しくなります。そんな時に心から有り難いと思ったのは、道中で優しい言葉を掛けて御接待して下さった山小屋の方々でした。

山小屋の前で休憩していると、「寒かったでしょう?どうぞ中に入って、温かいお茶でも飲んで休んで下さい。」と声を掛けて頂き、雨や風で冷え切った身体には有り難いものでした。

立ち寄った多くの山小屋で同じように御接待を頂き、皆さんの御気遣いと優しい言葉で疲れた体を回復することができ、前へ進む原動力となりました。

十四時頃、八合目にある元祖室に一人も欠けることなく、無事に到着することが出来ました。先に到着していた成田山東京別院深川不動堂の方々が、御出迎えをして頂き、大きな達成感を得られました。

その日は元祖室で宿泊し、翌日に山頂を目指す予定でしたが、残念なことに今年度の富士開山日より前に、山頂付近にて大岩の落石が起き、八合目から山頂にかけての山道が通行止めとなっていました。その為、今回は八合目の元祖室で御来光を拝むことになりました。しかし連日の雨の為、御来光を拝むのは難しそうな状況でした。

そして迎えた最終日。明け方の三時半頃に起床し、山小屋の外に出て見ると、なんと雨が止んでいました。しかし、雲が厚く覆っており太陽が見えるか不安な気持ちで待っていると、御来光の時間に近づくにつれて、雲が薄れていき、太陽が綺麗に顔を出してくれました。私はここまで頑張って登拝してきたことに対する、浅間大権現様からのご褒美だと思いました。体に当る太陽からの暖かさを感じながら、なんて美しい景色なんだと感動していました。無事に御来光を拝むことが出来た私たちは、その後富士山を下山し、高尾山へと無事に帰ってくることが出来ました。

私は去年、今年と富士登拝修行に参加させて頂き、多くのことを学ぶことが出来ました。一緒に修行をする仲間の大切さ、いろんな方から頂いた心からの優しさ、たくさんの方々が協力してくれるからこそ成し遂げられることがあるのだと。

お釈迦様は、命あるものに対して優しさと敬いの気持ちを持って接しなさい、という教えを残されています。私は今回の富士登拝を通して、お釈迦様が残された教えは、まさしくこのことだったのだと実感しました。これからはより一層、優しさと敬いの気持ちを持って周りの人たちに接していくよう、精進を重ねていきたいと思います。

私の富士登拝修行はこれで終了となりましたが、人生という山道を登拝する修行はまだまだこれからです。

合掌

御来光を拝んだ後に元祖室前にて撮影

富士登拝代参守のご案内

この代参守は、高尾山から続く祈りの道を、修験者によって運ばれ、霊峰富士山頂にて法楽し、本年一年の、諸縁吉祥・諸願円満の為に、ご祈念致します。

（授与料）一体壱千円以上（代参守と碑伝合わせて）

〈申し込み方法〉

山上・御護摩受付所又は、葉書に郵便番号・住所・氏名（必ずフリガナを明記下さい。）電話番号を明記の上、左記までお申し込み下さい。

※締め切は、七月末日とし、八月以降の申し込みは、来年度分とさせて頂きます

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二一七七
大本山高尾山薬王院内
富士事務局

代参守

碑伝

自然は先生

シャンソン歌手　友納あけみ

やっと秋の匂いがしてきました。本当に暑かった今年の夏もやっと終わりそう！夏の名残の蝉の声が季節の移ろいを教えてくれています！夕暮れの風、空を流れる雲！あちこちに小さな秋の気配がしてきました。

ここ桜上水に引っ越して来たのは木枯らしの吹きすさぶ二月…木々はみんな丸坊主で、オブジェのように並んでいて！桜上水と言うからには、どっかに桜があるはずだけど…どれが桜か全く分からず、春が来て一斉に花が咲きだした時、えーこれも、あれも桜！驚くばかり…美しい春を満喫！すっかり、この地が気に入ってしまいました。若葉が芽生えだし、生い茂った緑は暑い夏でも、快い風を運んできてくれました！

そして、これから秋がやってきます。この地で迎える初めての秋！ベランダから見える神社には大きな大きな銀杏の木があります。保存木にもなっているほどの立派な木！あの銀杏が彩付いたら！どんなに美しいだろう・・・緑道の桜の並木！家並みから除いている紅葉！今から本当に楽しみです。

ここ桜上水に来てから季節は本当に身近に感じられます！リビングの大きな窓は額縁の様に空を切り取り見せてくれます。晴れた日、雨の日、嵐の日でさえ、刻一刻と表情を変えていく空を眺めていると、あっという間に時が経ってしまいます…晴れた日は遠く富士山も姿を見せてくれます。自然の創りだす情景は限りなく繊細で幻想的です。夕焼けが空一面を茜色に染め上げるグラデーション！風に揺れる木の葉の揺らぎ…見ているだけで静かに心が満たされていきます。

あんな風に優しく柔らかく歌をお届け出来たなら…自然はいつも様々なことを語りかけてくれる、一番の先生です…

東京八王子北ロータリークラブ寄贈
高尾山遊歩マップ除幕式

東京八王子北ロータリークラブ（鈴木豪会長）が本年に創立二十五周年を迎えたことを記念して、このたび案内看板である、「高尾山遊歩マップ」をケーブルカーの高尾山駅とリフトの山上駅の二カ所に設置され、（公社）八王子観光コンベンション協会（大野彰会長）へ寄贈されました。

九月十四日には高尾山駅広場にて、約六十名の関係者が参列されて、薬王院の僧侶・山伏による除幕式が行われました。

除幕式の際に大野会長は、「多くの人が足を止めて確認するものなので、大変役に立つのでありがたい」とお話され、実際に除幕式後には、遊歩マップを確認する多くの登山者の姿がありました。

高尾山駅広場における除幕式の様子

おはなし散歩道

山萩の里と少年

湯沢町　富樫あい子

こぼれんばかりの山萩が咲く鎮守の境内で舞が奉納されていた。

そこへ狩りに来た舞好きの代官が立ち止まった。

「雅な舞だ。わしは舞を見る。皆は狩りに行け！」

勝手気ままな代官は、馬から降りた。

十五歳から二十歳位の娘が二人組で踊っている。

赤い着物と黒地の帯に萩の花が描かれていた。

体をひねり扇で顔を覆い帯の萩柄をちらりと見る仕草はドキッとするほど美しい。代官は見とれていた。世話役の老人が鎮守の社殿から出て来た。

「良かったら拝殿の方で御覧くだせぇ」

静々と代官を案内した。

「山萩の里にしては珍しく雅な舞じゃ」

「実は、大久保長安様が佐渡金山へ連れて行く人夫の中に、出雲の阿国の舞をこの境内で踊ったというのが始まりとか……」

「おぉ、そうか！」

そこへ踊り子が茶を運んできた。差し出す仕草の美しさに代官は一目ぼれした。娘が奥に下がると、世話役に名を聞いた。

「手前どもの娘でハギノといいます」

「そちの娘か、器量もいい。わしの奥方にしたい」

「滅相もない事です。田舎娘には務まりません」

世話役は地べたに頭をすりつけて辞退したが代官は無理やり奥方にした。

屋敷でのハギノは奥方の勤めを果たし、毎晩舞を踊り暮らしていた。

ある日のこと…

ハギノは代官の前でうっかり大きなクシャミをして代官の衣服を汚した。

「わしに向かってクシャミとは、無礼者出ていけ」

ハギノを屋敷から追い出した。家臣は代官の身勝手さに言葉を失った。

ハギノは今さら実家に戻れない。親が恥さらしになると思いつめ、人気のない山奥へと登った。

ふと、木立の奥に寺が見えた。ハギノは和尚に事情を話した。不憫に思った和尚は、置いてやることにした。寺で暮らしている内にハギノのお腹が大きくなり男の子を生んだ。男の子はいつしか成長すると自分の父親はどこに居るかと尋ねた。

ハギノは言い渋っていたが、とうとう「父親は代官様だ」と打ち明けた。

「お前を身籠った頃、代官様にクシャミで粗相をした。それで屋敷を出された」と話した。男の子はその後、一度と父親の事は聞かなくなった。

何年か過ぎて、代官は山萩の里に狩りに来た。

「見事な山萩じゃ！」

満足そうに代官は辺りを見わたすと、山萩を背に少年がいた。肩には鷹が止まっている。

「鷹匠か、腕前は如何に」

代官は鷹の訓練をしている少年に声をかけた。

「まだまだです」

はにかみ、答えた。

「射止めるぞ。訓練せ！」

「ありがとうございます」

少年は着ていた道行をパッと脱ぎ野絆天に黒い角帯が凛々しく見えた。

少年は紐を角帯から外し鷹を手に載せて構えた。

代官は弓を引き、矢を放すと、いきなりクシャミをして手がぶれた。

鷹は飛び立ちもせず、代官にしっぽを向け、少年の肩に飛び乗った。

「無礼な鷹だ！」

「臆病な鷹で、クシャミの音が怖いのです」

「クシャミは誰もがする」

という代官に少年は、「誰もするなら、なぜ母を追い出したのですか？」

代官は少年の角帯の萩柄に目がいった。すぐに少年の年齢を聞いた。

「十二歳です」

「その萩柄の角帯は？」

「母が自分の踊りの帯を仕立て直してくれました」

代官は、母親の居るところに急いで案内させた。

「ハギノだったか、許せ」

代官は深く詫びて二人を連れ戻したという。

（挿し絵・小出　茂）

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
蟋蟀在戸
「きりぎりすとにあり」
十月十八日～十月二十二日

通常「蟋蟀」はコオロギをさしますが、昔の人はコオロギをキリギリスと呼んでいました。

この頃になるとコオロギやキリギリスなどの昆虫が軒下で鳴くようになり、秋の夜長を楽しませてくれます。

今月の風物詩
柿

柿は古来より実を食用として、木を建材として、日本人の生活に根付いてきました。

「柿が赤くなると医者が青くなる」という諺にもあるように、柿はビタミン類とミネラルが豊富で栄養価が高く、医者いらずの果物ともされておりました。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「ドクダミの花」

八王子市　栃谷玲子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十一段　勝手気ままなことをするな

他人に構わず自分の都合ばかりを考えて、わがまま放題に振る舞うことは、もちろん褒められた行いではありません。我々の人生は、必ず多くの人とのつながりを持ちますので、他人を思いやることを忘れずにいましょう。

秋彼岸先師墓地参り

九月二十三日

院内散歩 32

～薬王院の展示物～

木版画　『蒼天』
作・井堂雅夫

高尾物語 18

八王子城落城

絵・橋本豊治

天地の　清き中より　生れきて
もとのすみかに　かへるべらなり

（伝・北条氏照辞世の句）

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉率いる大軍が北条氏を討つべく関東へと攻め寄せてきた。

八王子城も戦渦に巻き込まれることになった。戦役当時、城主の北条氏照は小田原城におり、八王子城には氏照の家臣達の千人程が守っていた。

八王子城に攻めてきたのは上杉景勝と前田利家を中心とする、約三万人の軍であった。六月二十三日早朝から攻撃を受け、その日の内に落城した。

当時の八王子城では、薬王院を含む近隣の寺院から僧侶が集められ、戦勝祈願のため御護摩修行を行っていたと伝わる。

八王子城の落城を聞き、北条家五代当主の氏直は豊臣軍に降伏を決断した。この戦役の責任者として、北条家先代当主の氏政と氏照は切腹した。

うまい話の
裏にはきっと
多くありがち
落し穴

高尾山の昆虫 120

ショウリョウバッタ

十月になり秋も深まると、夏を謳歌した虫たちが次第にその姿を消していく一方、バッタの仲間たちの本格的なシーズンになります。

バッタと聞くと思い浮かぶのが、ややガッチリして重量感があり、歌舞伎の隈取りのような顔を持つトノサマバッタと、それとは対照的に細長く流線型のスマートな体型をしたショウリョウバッタでしょう。

この名の由来は諸説がありますが、出現時期および初盆を迎えた故人の霊を乗せて運ぶ精霊船に似ているからだというのが有力です。

日本最大のバッタである本種は、飛ぶときにキチキチと音を立てることが知られていて、キチキチバッタとも呼ばれます。

オスとメスでは親子程に大きさが違い、子供の頃大型のメスを採って喜んでいると後肢が簡単に取れてしまいショックを受けた記憶があります。

メスの背に小さなオスが乗っている光景はオンブバッタに、また似た名のショウリョウバッタモドキという種もいますが、大きさ的に間違えることはありません。

清楚且つ繊細で霊的な神秘性をも感じさせるバッタだと思います。

（文　松島　孝　撮影　上村　雅昭）

登山だより

■十一月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）
四日、十六日、二十八日
弁天様御縁日
五日、十九日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）
八日
仏舎利詣り（仏舎利塔）
二十三日
月例写経会
（十三時山麓不動院）
二十四日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）
二十八日
奥之院開扉供養
（十時山麓不動院）
二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。

尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間
（4月15日～10月31日まで）

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

秋の特別精進料理「もみじ膳」のお知らせ

本年も毎年ご好評をいただいております、秋の味覚を楽しむ特別精進料理「もみじ膳」を実施致します。大広間でのお食事となり、ご予約無しでご案内しております。食材に限りがありますので早めの来山をお願い致します。

期　間　十月七日(月)～十二月六日(金)

営業日　平日のみ（団体予約多数の場合は実施しないこともありますのでご了解下さい）

※ご来山の際には、事前にホームページをご覧になるか、お電話などで御照会下さい。

価格　二千九百円

特別精進料理
「もみじ膳」　2,900円
（11:00より受付開始）

※写真は昨年の料理のものです。

高尾山報助成金志納者
御芳名（順不同・敬称略）

八王子市　高根澤　武
京都市　松本　恭俊
新座市　彰山　粧麗
〃　髙橋　久子
墨田区　神田　みつ江
富里市　森　照森
鹿沼市　松本　俊夫
八王子市　佐藤　光
府中市　安江　富士夫
八王子市　天　城
〃　山本　テル子
〃　峯尾　洋一郎
桐生市　山藤　春雄
日野市　柴田　利男
八王子市　小池　まり子
加須市　塩崎　君子
前橋市　八木原　茂
邑楽郡　福田　進
八王子市　松木　艶子
狭山市　日野岡　保次
髙尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
髙尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

髙尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp